

「日本フィルの公演再開を応援しています」

 **MUFG** 三菱UFJニコス株式会社

鹿島建設株式会社

三井不動産株式会社

株式会社リョーサン

 **ELECOM**
LIFESTYLE INNOVATION

ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。

 **JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA**

—— 創立 指揮者 渡邊 暁雄 ——

日本フィルハーモニー交響楽団

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

特別演奏会

Special Concert 2020

2020年 7月 13日(月) 午後7時開演 / サントリーホール

2020年 7月 30日(木) 午後7時開演 / サントリーホール

2020年 8月 1日(土) 午後2時開演 / サントリーホール

本日の公演は休憩がありません。ご了承ください。

感染防止にご協力をお願いいたします

- スタッフはマスクやフェイスシールドを着用します。また、小声で対応させていただきます。
- 入場時の手指消毒、手洗いをお願いいたします。
- ホール内ではマスクを着用し、周囲のお客様への配慮をお願いいたします。
- 開演前はお席でお過ごしください。また時差退場へのご協力をお願いいたします。
- プラボー等掛け声はお控えください。ホール内では大声での会話を避けるようご協力をお願いいたします。
- 出演者へのプレゼント(お手紙・お花などを含む)、面会、楽屋入り待ち、出待ち等はお控えください。
- チケットご購入者と演奏会ご来場者のお名前が異なる場合は、ご来場者のご住所、お名前、電話番号を弊社までお知らせください。
- 万が一感染者が発生した場合など、必要に応じて保健所等の公的機関へお客様のお名前と連絡先を提供する可能性があります。

主催 ● (公財) 日本フィルハーモニー交響楽団

■お客様へのお願い

- 演奏中は、お手持ちの時計のアラーム、また携帯電話などの電源はお切りください。
- 手荷物、傘、チラシ類などの物音や話し声で他のお客様のご迷惑にならないようご配慮をお願い申し上げます。
- 録音、録画、写真撮影は禁止されております。

2020年7月13日(月) 午後7時開演 / サントリーホール
7:00pm, July 13th (MON), 2020 at Suntory Hall

Program

J.S. バッハ: トッカータとフーガ 二短調 BWV565 (約9分) [オルガン独奏]

Johann Sebastian BACH: Toccata and Fugue in d-minor, BWV565, organ solo

J.S. バッハ: 主よ、人の望みの喜びよ BWV147 (約4分) [オルガン独奏]

Johann Sebastian BACH: Jesus, bleibet meine Freude, BWV147, organ solo

ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.61 (約42分)

Ludwig van BEETHOVEN: Concerto for Violin and Orchestra in D-major, op.61

指揮: 井上道義 Conductor: INOUE Michiyoshi

ヴァイオリン: 前橋汀子 Violin: MAEHASHI Teiko

オルガン: 石丸由佳 Organ: ISHIMARU Yuka

コンサートマスター: 木野雅之 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: KINO Masayuki, JPO Solo Concertmaster

ソロ・チェロ: 菊地知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello

◆井上道義 [指揮]

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。1971年グイド・カンテルリ指揮者コンクール優勝。ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、京都市交響楽団音楽監督兼常任指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を歴任。詳細プロフィールはP.4を参照。

◆前橋汀子 [ヴァイオリン]

2017年に演奏活動55周年を迎えた前橋汀子は、日本を代表する国際的ヴァイオリニストとして、その演奏は優雅さと円熟味に溢れ、多くの聴衆を魅了してやまない。国内外で活発な演奏活動を展開し、これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・フィル、フランス国立管、クリーヴランド管、イスラエル・フィルなどの名楽団、メータ、ロストロポーヴィチ、サヴァリシュ、マズア、小澤征爾など世界の一流で活躍するアーティストとの共演を重ねている。

近年、小品を中心とした親しみやすいプログラムによるリサイタルを全国各地で展開、好評を得ている。レコーディング活動も活発で、最新CDは自身2度目の録音となる「バッハ: 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ全集」が2019年8月発売。

2004年日本芸術院賞受賞、2007年第37回エクスンモービル(現・JXTG音楽賞)音楽賞洋楽部門本賞を受賞。2011年春の紫綬褒章、2017年春の旭日小綬章を受章。
使用楽器は1736年製作のデル・ジェス・グアルネリウス。



©Mieko Urisaka



©篠山紀信

◆石丸由佳 [オルガン]

東京藝術大学卒業、同大学院修了。デンマーク王立音楽院、シュトゥットガルト音楽大学にて国家演奏家資格取得。世界的権威のあるシャルトル国際オルガンコンクールで優勝、併せてJ. アラン賞受賞。パリのノートルダム大聖堂等ヨーロッパ10か国以上の各地、また日本全国でリサイタルを行っている。国内外の主要オーケストラと多数共演。テレビ朝日『題名のない音楽会』、NHK紅白歌合戦に出演するなど幅広く活躍中。情熱的で豊かな音楽性と高度な演奏テクニック、楽器の個性を活かした緻密なレジストレーションは各所で高い評価を受けている。2019年、キングレコードより2枚目のCDアルバム「オルガン・オデッセイ」をリリース。2020年4月より新潟市民芸術文化会館リハーサルとびあ専属オルガニストに就任。武蔵野音楽大学非常勤講師。HP: <http://yukaishimaru.pecori.jp>



©Naoko Nagasawa

→ 曲 目 解 説 ←

J.S. バッハ: トッカータとフーガ 二短調 BWV565

作品番号が1100を超える膨大なヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)の作品のなかでも、最も有名な作品の一つ。トッカータとは“触れる”という語源からもわかる通り、軽く快速な即興的パッセージを含む楽曲のことを指し、一方フーガは、一つもしくは複数のテーマが次々と複雑に模倣反復されていく対位法的楽曲を意味する。強烈な印象を与える導入部を経て、その後は即興的パート(トッカータ)、対位法的展開(フーガ)、そして再び即興的部分に立ち返る三部形式といえる。ただし、この曲の「トッカータ」と「フーガ」はそれぞれ複雑に関連性を絡めながら展開するため、単にトッカータ部とフーガ部の2曲が接続されているものではない。青年期ならではの大胆さが前面に押し出された作品で、後期の深味を増した音楽とはまた一味違った、若かりしバッハの挑戦的な側面が窺える。

J.S. バッハ: 主よ、人の望みの喜びよ BWV147

J.S. バッハの200曲に及ぶ教会カンタータの中から、独立して演奏される機会の多い名曲。カンタータ第147番《心と口と行いと生活をもって》(聖母マリア訪問の祝日) BWV147の中のコーラルで、三連音の特徴的なメロディに簡素なコーラル旋律が重なり合う。

ベートーヴェン: ヴァイオリン協奏曲 二長調 op.61

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は協奏曲様式の作品を13曲手がけているが、一般に協奏曲として知られているのは、ピアノ協奏曲5曲、三重協奏曲とこのヴァイオリン協奏曲であろう。仮にヴァイオリン協奏曲のベートーヴェン自身によるピアノ協奏曲編曲を加えれば8曲ということになる。

ベートーヴェンにとってヴァイオリンは極めて身近な楽器であり、ボンの宮廷楽団員時代にはオーケストラでヴィオラ及びヴァイオリン奏者として活躍していた。ウィーン時代初期のベートーヴェンは確かに優れたピアニストとして活躍していたが、1798年から1802年までのわずか4年間にヴァイオリン・ソナタの全10曲中9曲までを完成させたことに注目しなければならないし、また同じ時代に2曲の協奏曲作品「ヴァイオリンとオーケストラのためのロマンズ」2曲(ヘ長調とト長調)を書いていたことも忘れてはならない。このように、ヴァイオリン曲の書法に精通し、ピアノ独奏用の協奏曲で協奏様式を身につけ、そして交響曲によって革新的なオーケストラの扱い方も会得していた最も充実した創作期にこの作品が生まれているのである。

1806年12月23日に名ヴァイオリニストのフランツ・クレメントが主催する音楽会で初演されたが、初演日前日の12月22日まで完成していなかった。ほとんど初見に近い形でクレメントは初演に臨んだのであるが、創作段階からベートーヴェンは何度もクレメントと打ち合わせをしながら細部を書き進めていたゆえ、クレメントの初演が全くの初見であったというのは誇張だろう。

第1楽章: アレグロ・マ・ノン・トロppo、二長調、4分の4拍子。

第2楽章: ラルゲット、ト長調、4分の4拍子。

第3楽章: ロンド アレグロ、二長調、8分の6拍子。

2020年7月30日(木) 午後7時開演 / サントリーホール

7:00pm, July 30th (THU), 2020 at Suntory Hall

Program

ドヴォルジャーク: 交響曲第9番 ホ短調 op.95《新世界より》(約40分)

Antonín DVOŘÁK: Symphony No.9 in e-minor, op.95 "From the New World"

指揮: 井上道義 Conductor: INOUE Michiyoshi

コンサートマスター: 田野倉雅秋 [日本フィル・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Concertmaster

ソロ・チェロ: 菊地知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello

◆井上道義 [指揮]

1946年東京生まれ。桐朋学園大学にて齋藤秀雄氏に師事。1971年グイド・カンテルリ指揮者コンクール優勝。1976年日本フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会で日本デビュー。1977年から1982年までニュージーランド国立交響楽団の首席客演指揮者、1983年から1988年まで新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督、1990年から1998年まで京都市交響楽団の音楽監督、常任指揮者、2014年から2017年まで大阪フィルハーモニー交響楽団の首席指揮者、2007年から2018年まではオーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を務め、斬新な企画と豊かな音楽性で注目を浴びた。

1999年から2000年にかけて新日本フィルハーモニー交響楽団と共にマーラー交響曲全曲演奏会を取り組み「日本におけるマーラー演奏の最高水準」と高く評価された。2007年「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収め、同プロジェクトを収録した「ショスタコーヴィチ交響曲全集 at 日比谷公会堂」BOXを2017年2月にリリース。2014年4月に病に倒れるが、同年10月に復帰を遂げる。2015年全国共同制作オペラ「フィガロの結婚」(野田秀樹演出)を総監督として、10都市14公演の巡回公演を大成功へと導いた。2017年7月、大阪国際フェスティバルにて「バーンスタイン: ミサ」を自身23年ぶりに総監督(演出兼任)として率い壮大で唯一無二な舞台を作り上げた各誌にて評価を受けた。

2016年「渡邊暁雄基金特別賞」、「東燃ゼネラル音楽賞」、2018年「大阪文化賞」「大阪文化祭賞」「音楽クリティク・クラブ賞」、2019年「有馬賞」を受賞。オーケストラ・アンサンブル金沢桂冠指揮者。

オフィシャルサイト <http://www.michiyoshi-inoue.com/>



©三浦興一

曲目解説

ドヴォルジャーク: 交響曲第9番 ホ短調 op.95《新世界より》

アントニン・ドヴォルジャーク(1841-1904)はチェコの国民楽派を代表する作曲家のひとりであり、彼の芸術表現には先輩スメタナからの影響による民族主義的性格が強く窺える。祖国で学び、早くから才能を発揮していたが、1875年、34歳のときにオーストリア政府の奨学生に応募しウィーンに留学。奨学生試験の審査員のひとりであったブラームスに出会い、ドヴォルジャークはこの偉大な交響曲作曲家の重厚な作風からも大きな影響を受けるようになった。ブラームスの力添えで多くの出版社とも交渉するようになり、ドヴォルジャークの名声は次第に広くヨーロッパに知れわたっていったのである。

1892年秋に彼はニューヨークのナショナル音楽院の創設者ジャネット・サーバー女史に招かれ渡米し、1895年春までの2年半に及ぶ音楽院院長職時代に次々と傑作を書き上げた。さまざまなアメリカの民俗音楽を採集研究し、とりわけアメリカ先住民の民俗音楽や黒人霊歌に深い関心を示し、それらの音楽から受けた新鮮な感動を素直な形で自作品、例えば弦楽四重奏曲第12番《アメリカ》などに反映させている。

一方、異郷に暮らすドヴォルジャークはアメリカにあったボヘミア移民の村をしばしば訪れ、母国への郷愁を常に心に抱いていた。そうした新しい世界から受ける新鮮な印象とボヘミアへの望郷の念とが入り交じった、独特のニュアンスをもった作品が生み出されていくのだが、その代表作が1893年に作曲されたこの交響曲である。1893年春から約半年をかけてスケッチし、この年の夏休みをアイオワ州にあったボヘミア移民の町で過ごししながら、オーケストレーションもあわせて進め、秋に全曲を完成させている。初演は完成後間もない1893年12月16日、アントン・ザイドル指揮のニューヨーク・フィルハーモニック協会管弦楽団演奏会で行われた。

第1楽章: アダージョ、ホ短調、8分の4拍子〜アレグロ・モルト、4分の2拍子、緩徐序奏部つきソナタ形式。

第2楽章: ラルゴ、変ニ長調、4分の4拍子、複合三部形式。このコーラル・アングレで奏される主題はとりわけ美しく、詩をつけて「家路」という歌として親しまれている。

第3楽章: モルト・ヴィヴァーチェ、ホ短調、4分の3拍子、スケルツォ楽章。

第4楽章: アレグロ・コン・フォーコ、ホ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。金管で奏される力強い主題をもった堂々たるフィナーレ楽章。

Member's TVU CHANNEL CLASSICAL MUSIC

クラシカルミュージック

<https://members.tvuch.com/>

7/13、7/30、
8/1もライブ配信!
アーカイブ
視聴あり

Member's TVU CHANNEL は、クラシック音楽のコンサートの臨場感をいつでもどこでもお楽しみいただけるインターネット・サイトです。コンサートホールからのライブ配信、さらにコンサートが終わったあともアーカイブ映像としていつでも視聴可能です。これまでテレビマンユニオンチャンネル(tvuch.com)では、クラシック音楽を気軽に楽しめるように、コンサート映像を10分前後に短く抜粋して無料でお届けしてきました。Member's TVU CHANNELでは、より本格的に、コンサート全体を有料で配信します。2020年7月、クラシック・コンサートの新しい楽しみ方がスタートします。

2020年8月1日(土) 午後2時開演 / サントリーホール

2:00pm, August 1st (SAT), 2020 at Suntory Hall

Program

ベートーヴェン: 《エグモント》序曲 op.84 (約9分)

Ludwig van BEETHOVEN: Overture from "Egmont", op.84

ベートーヴェン: 交響曲第5番 ハ短調 op.67 《運命》 (約31分)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.5 in c-minor, op.67

指揮: 広上淳一 Conductor: HIROKAMI Junichi

コンサートマスター: 田野倉雅秋 [日本フィル・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Concertmaster

ソロ・チェロ: 菊地知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello



©Masaaki Tomitori

◆広上淳一 [指揮]

東京生まれ。東京音楽大学指揮科に学ぶ。1984年、26歳で「第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」に優勝。以来、フランス国立管、ベルリン放送響、コンセルトヘボウ管、モンテリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、ウィーン響などメジャー・オーケストラへの客演を展開。これまでノールショピング響、リンブルク響、ロイヤル・リヴァプール・フィルのポストを歴任、このうちノールショピング響とは94年に来日公演を実現、さらに米国ではコロンバス響音楽監督を務めヨーヨー・マ、ミドリをはじめ素晴らしいソリストたちとともに数々の名演を残した。

近年では、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、スイス・イタリア管、モンテカルロ・フィル、バルセロナ響、ビルバオ響、ポーランド国立放送響、スロヴェニア・フィル、サンクトペテルブルク・フィル、チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラ、ラトビア国立響、ボルティモア響、シンシナティ響、ヴァンクーヴァー響、サンパ

ウロ響、ニュージーランド響等へ客演。国内では全国各地のオーケストラはもとより、サイトウ・キネン・オーケストラ、水戸室内管弦楽団にもたびたび招かれ絶賛を博している。

オペラ指揮の分野でもシドニー歌劇場デビューにおけるヴェルディ《仮面舞踏会》、《リゴレット》が高く評価されたの

を皮切りに、グルック、モーツァルトからプッチーニ、さらにオスバルト・ゴリホフ《アイナダマール》の日本初演まで幅広いレパートリーで数々のプロダクションを成功に導いている。

2008年4月より京都市交響楽団常任指揮者を経て2014年4月より常任指揮者兼ミュージック・アドバイザー。2015年には同団とともにサントリー音楽賞を受賞。2017年4月からは札幌交響楽団友情客演指揮者も務める。常任指揮者として13シーズン目の2020年4月より京都市交響楽団第13代常任指揮者兼芸術顧問に就任。2020年4月より京都コンサートホール館長も務める。また、東京音楽大学指揮科教授として教育活動にも情熱を注いでいる。

→ 曲 目 解 説 ←

ベートーヴェン: 《エグモント》序曲 op.84

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が書いた「ゲーテの悲劇『エグモント』への大オーケストラのための序曲」が、この作品の正式名称であり、もともとは舞台劇用の付随音楽の一部として作曲された。「エグモントのための音楽」全体は、序曲を含め全10曲からなる作品で、作曲時期は1809年10月から翌1810年6月初旬までの間である。

スペインの圧政下に苦しむオランダを舞台とするこの物語は、フランドルの領主エグモント伯爵が祖国独立運動の指導者として立ち上がり、捕らえられ処刑されるまでを描く。ここで演奏される序曲は、ソステヌート・マ・ノン・トロップの、雄大で悲劇を暗示するような悲壮感を持って始まる。その後アレグロのソナタ形式主部が続き、終結部で精細に富むアレグロ・コン・ブリオに転じ、死をもって達成される英雄の勝利を歌い上げて曲を結ぶ。

ベートーヴェン: 交響曲第5番 ハ短調 op.67 《運命》

この交響曲が作曲された時期、ベートーヴェンは毎夏をバーデンやハイリゲンシュタットなどの避暑地で作曲を続けていた。この頃彼は、すでに絶望的となった聴覚異常を苦にしか、郷里のふたりの弟に宛てて有名な“ハイリゲンシュタットの遺書”をしたためている。作曲家として致命的な耳の障害を前に苦悩したベートーヴェンは、最終的には「運命の首根っこを押さえつけ、組み伏せる」という言葉の通り見事にこの困難を克服し、その逆境の苦しみを優れた作品群の煌めきへと昇華させたのだった。後世の研究家たちが“運命”という通称を持つこの交響曲に、そうしたベートーヴェンの魂の遍歴を読みとったのもうなずけることだろう。

「運命はこのように扉をたたく」と作曲者自らが説明したという第1楽章冒頭の4音動機は、全4楽章を有機的に統一する要素として、その可能性の隅々までが使い尽くされ、交響曲全体の性格を決定づけている。楽曲構成の斬新さに加え、管弦楽の規模も古典的な編成の上にピッコロやコントラ・ファゴット、さらにはトロンボーンまで動員されるという大きさを見せている。またハ短調の悲劇的な響きからハ長調の解放に至る「ドラマ的構図」は、後の交響曲第9番の“苦悩を突きぬけて歓喜へ”に展開し、のちのロマン主義の作曲家たちに多大な影響を与えることとなるのである。

この交響曲は1808年12月22日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されたが、演奏会は進行の不手際などの事情によって大失敗に終わっている。しかし“宿命と人間の闘争”“苦悩を克服しての勝利”という古今の人類に普遍的なテーマは、この作品を不朽のものとしている。

第1楽章: アレグロ・コン・ブリオ、ハ短調、4分の2拍子。

第2楽章: アンダンテ・コン・モート、変イ長調、8分の3拍子。

第3楽章: アレグロ、ハ短調、4分の3拍子。

第4楽章: アレグロ、ハ長調、4分の4拍子。